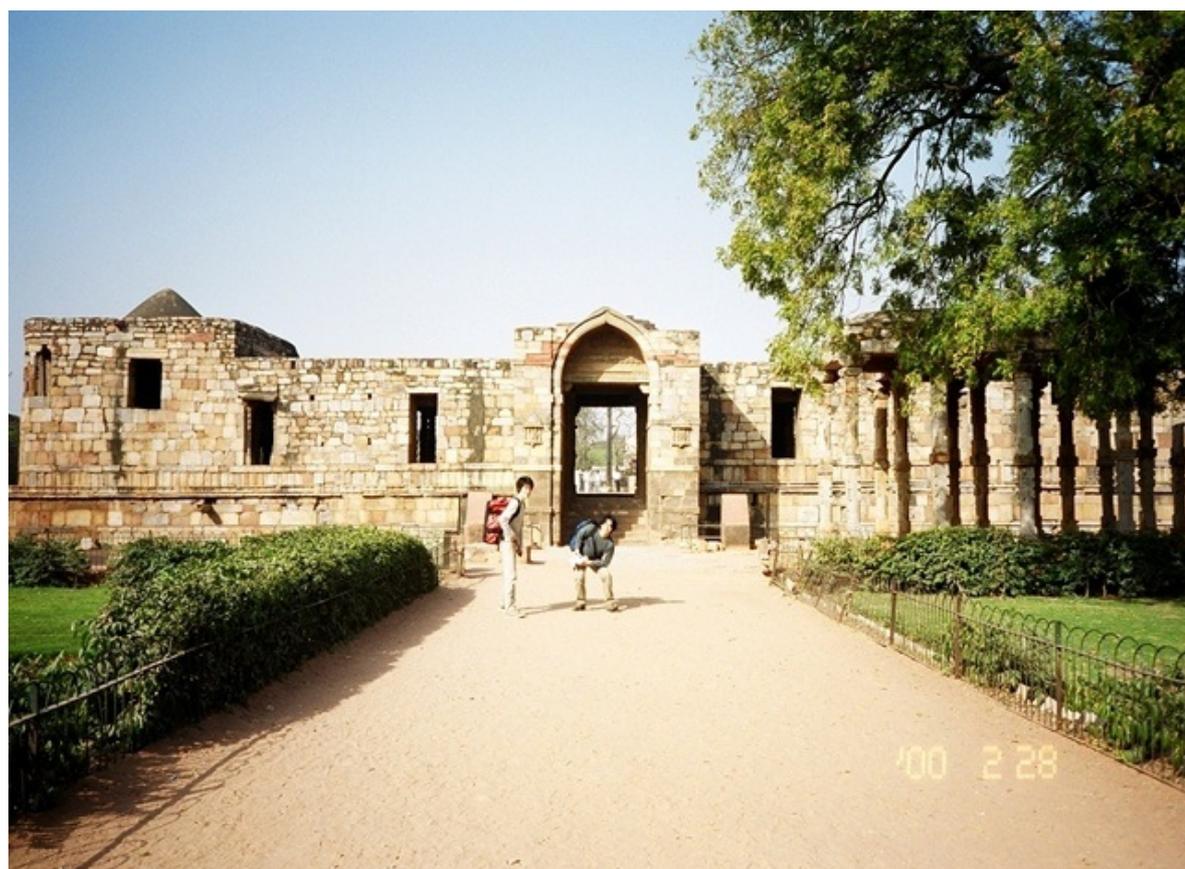
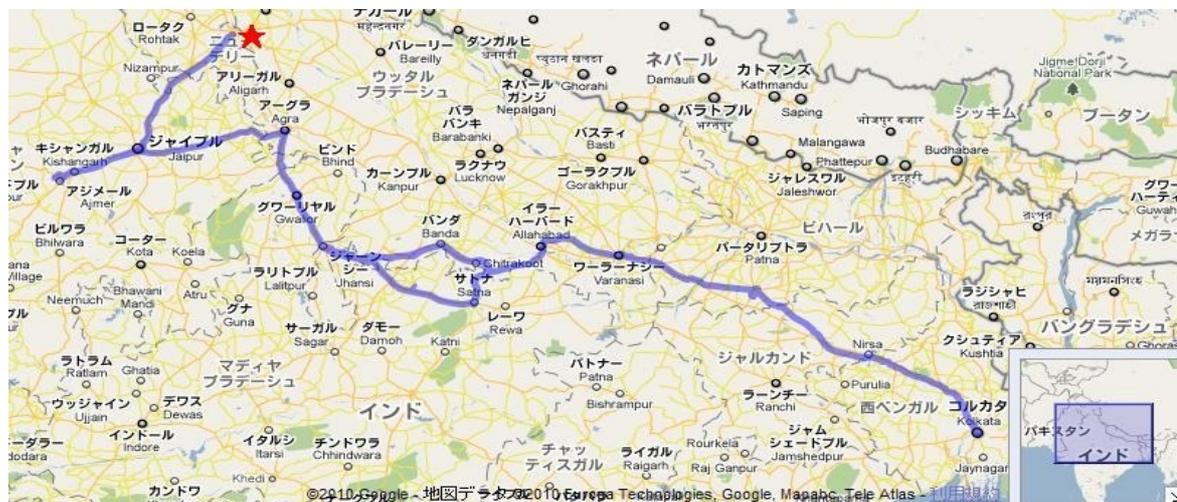
A photograph of the Sun Temple in Khajuraho, India, showing its intricate carvings and tiered structure. Two people are standing in front of the temple for scale. The sky is clear and blue.

22歳、インドへ。

笠原寛人 著

## 第1章 DELHI (デリー)

# 第1章 DELHI (デリー)



## 出合いと出逢い

---

いつもと変わらぬ毎日は、今日からとてつもなく変わる事となった。

<02/27(SUN)>

海外旅行が初めてということもあって、成田空港のすべは全く知らず、午前9時のHIS規定の集合時間に遅れて到着した。何がなんだかわからぬまま、とりあえず出国審査を済ませ、エア・インディアの搭乗口を目指した。そして、インドはここから始まったのだ。AI305便は、頼りなさそうな翼を俺たちに見せ、△(三角)の窓や、香辛料が効き過ぎた空弁カレーは、ありふれた毎日を過ごしていた俺達にとって、大きな衝撃だった。

9時間後の俺のエネルギーは、行く前とは打って変わって微々たるものになっており、それにも関わらずインドの第1ラウンドのゴングは、いつの間にか鳴っていたようだった。周りに群がる真っ黒いインド人だらけの中、黄色人種3人に出題されたの最初の問題は、『如何にして、今日を明日につなげるか』だ。そう、まず目指すは、今日の宿。それを見つけるには、DELHI(デリー)の中心部に行かなくてはならないのだ。

空港内の銀行でUSドルをインド通貨のルピーに換えている時だった。1人の日本人が話しかけてきたのだ。おそらく同い年ぐらいか、妙に落ち着いている。インドには何度も来ているのかと思ったぐらいだ。「今日の宿とか決まっていますか?」「いや、まだ。」「いっしょに行きませんか?」

3人でインドに来たからには、誰にも頼りたくはなかったが、この時ばかりは、何人いても心強かった。「行きましょう。」この後、彼とは2日間一緒に過ごすことになる。林君。強がらず優しい素直なヒト。

同志も増え、俺達は「地球の歩き方」に書かれている通り、「空港を出て左」のバス停を目指した。しかし、左側には何もなく、そう簡単には生かしてくれないらしかった。少し意地悪にインドは、俺達を迎え入れたようだ。さあ、ついに、頼るは3人の同志のみ。とりあえず、話しかけてくる怪しいインド人たちは無視し、警察官らしき人にバス停を尋ねたが、怪しいインド人たちと同じ答えを出す。「出て右」らしい。もう、どうにでもなれという反面、どうにか乗り切ろうとの葛藤。時差疲れとの戦いでもある。しかたなく、たかってくるインド人の言うことに従い、「出て右」を目指す。俺達は「バス」に乗りたいわけだが、彼らの言うバス停に着いたとたん、「タクシー、モア、ベター」「タクシーノハウガイイヨ」はじまった、少しの笑いと怒りにも似た気持ち。その後、空港の外を2周ほど回ったか、なぜだか同志が十数人増えており、日本人の塊になってしまった。

結局、俺達は、自称インド2回目の詳しい(?)日本人に、バス停の場所と値段を教えてもらい、バス停でバスを待つことにした。ところが、バス停は、怪しいインド人たちの言った「出て右」にあったのだ。そう考えると、インド人も、みんながみんな、嫌なやつではないようだ。

そうこうするうちに、何かが到着した。どう見ても安全とは思えない「バスらしきもの」、ターバンをかぶった顔が真っ黒な体格のいい運転手、優しそうなバスの車掌らしきヒト。とりあえず、乗ることにする。50Rsを払った後、ライトなしのバスは、日本人十数人と、欧米人1人を乗せて走り出した。空港がある場所は、DELHIの郊外なので車があまりなかったのだが、車が増えてきて初めて、ここは日本ではないと確信した。鳴り響くクラクション、排ガス、サイドミラーなしの車、逆走する車。ついにインドが、俺達の中に飛び込んできた。

バスの目的地は「メインバザール」と呼ばれる安宿街。ところで、インドに来る前に、外務省のホームページで、海外危険情報なるものに目を通しておいた。そこには、「デリー市の北部に位置するオールドデリー地域及びその周辺（特にメインバザール地区）においては、...爆弾テロ事件が断続的に発生し、多数の死傷者が出ました。...98年には同地域にある長距離バスターミナル内において爆弾テロ事件が発生...昨年も繁華街において爆弾テロ事件が発生し、今年1月には、オールドデリー駅で列車に仕掛けられた爆弾が爆発し、23人が負傷しました。これまで日本人の被害はないものの、今後も爆弾テロ事件が発生し、事件に巻き込まれる可能性も排除できません。なお、ニューデリー地域においても、昨年爆弾テロ事件が1件発生しています。」とあった。

俺達の目指しているところは、その危険区域であった。その情報を俺は重々承知していたのだが、インド2回目の詳しい(?)日本人に、その「メインバザール」の安宿街を紹介され、側には林君と小松と岡本という頼もしい仲間がおり、バスは日本人だらけで妙な安心感がり、外務省情報ははたして正しいのかという気持ちに傾く自分がおり、その上、極度の疲れが「メインバザール」への冒険を後押していた。

[Now, we are staying "SHAILAY GUEST HOUSE" Pahar Ganj St.]

<02/28(MON)>

朝の目覚めは、町のざわめきからだった。牛やら鶏やら犬、予想もつかない何かの鳴き声。インドに来たなと思った。さらに窓を開けると、人の家の台所らしきところ。朝食の炊事の煙が見える。

昨日はあの後、バスの終点「メインバザール」に到着し、バスターミナル周辺にたむろするインド人の間をくぐり抜け、安宿街へ向かった。2件目の宿に、トリプルルームの部屋が空いていたので、1人70Rs（¥100＝約40Rs）という安さで、寝床を確保することができた。



小松と岡本は、腹が減っていたらしく、本場のカレーを食いにいったのだが、俺と林君は、持ってきたカロリーメイトで我慢した。正直言って、インド人の不気味さが少し恐かったのと、エア・インドアの空弁カレーがまずすぎたので、外に出る気も、カレーを食う気にもなれなかった。

あと19日間のインド。どれが快適な宿であるかはわからないが、この宿は、とにかく安全であったことは確かなようだった。誰も、死んではないし、何も、盗られてはいないから。そう、その時は“安全だった”と思っていた。

12時のチェックアウトを済ませ、メインバザールを散歩する。あてもなく、重いリュックを背負って。いろいろな路地から、うまそうなおいがする。爺さんがやっている靴屋で、岡本は、サンダルを買った。革製で100Rs、¥250ぐらいか。まあ、その後、そのサンダルを50Rsで、俺が買ったのだが。

インドを理解したのは、今日だったのかもしれない。その事件の後だ。

少し日本語のできるインド人、当時の流行ギャグ「だっちゅーの」を連発、そして、「プリクラ」を自慢する、京都に彼女がいるそう…。俺は興奮した。日本をよく知るインド人にと、英語を何となく理解している自分に。俺はそれにうかれていたようだ。そのジャイプル出身の「FRIEND（彼は自分のことをこう呼んでいた）」に、政府直営のインド政府観光局の場所を聞くと、どこからともなく、あまりにもいいタイミングで、リキシャ（自転車のタクシー）が。

4人で、4Rs。その時は、リキシャの値段はこんなもんかという気持ちと乗ってみたいという気持ちと、優しいインド人（「FRIEND」）。みよーに、気分がいい。

リキシャの景色は最高だった。様々な匂いを醸し出すインドの爽やかな風を、身体全体で感じ、リキシャの横を歩くインド人たちは、昨夜のバスターミナルの不気味さとはうって変わって、笑顔で手を振ってくる。「ジャパーニ！」子供たちもそう叫ぶ。

俺達が目指している政府観光局は、「コンノートプレイス」という、高級住宅街にあるようなのだが、何分走ってもそのような場所は見えてこない。もしやと思い始めたのはこのころだ。しかも、さっきの「FRIEND」が、後から他のリキシャについて来るではないか。そして、到着した。観光局は観光局だった。「～TOURIST」と書かれているのが見える。スモークがかった入り口を見て、これが噂のかと、確信した。「ぼったくり観光局」。俺達は、騙されかけていたようだ。俺は、インド2日目にして、インド人を怒鳴りつけた。そこには、ある意味、少しの悲しみも含まれていた。ーインドに来て初めて語り合ったインド人が「BAD FRIEND」だったこと。

今いる場所が、ついにわからなくなった、尋ねる人尋ねる人が、嘘つきに思えてきた。通りの名前などどこにも書いてないし、道路は網の目のよう。俺が怒鳴りつけたのが効いたのか、

「BAD FRIEND」と気の弱そうなリキシャ引きは、俺には、かまわなくなった。が、「獲物はあと3人いるから、お前はもういい」のようなそぶりで、しかも、その後1時間ぐらいついてきた。

どうやら「インド」は、こんな感じらしい。相当疲れそうだが、すごい国に来てしまったみたいだ。怒りはもう薄れ、今度は楽しくなってきた。退屈な毎日からおさらばして、さんざん周りの人から、危険な国だから行かない方がいいと言われたインドに来た甲斐があった。そんなことを思いながら、腹が減ってきていたので、レストランを探していると、日本でも見慣れた「M」のマークがあった。

さて、疲れてはいたが、インドの一端に触れた俺達は、少々いい気分で、あの衝撃的な事実を聞かされるマックに入ったのだった。

その衝撃的な事実を語ってくれたのは、真っ黒な顔をした日本人であった。顔を覆い尽くす黒髪と、かすかに見えるどす黒い顔はとても日本人とは思えない。小松が話しかけるまで、俺は日本人だとは思っていなかった。聞くところによると、ネパールを旅してきたらしい。おそらく相当の期間だろう。彼が語った衝撃の事実とは、こうだ。昨日、メインバザールで爆弾テロ事件が起きた。その爆弾テロにより、ホテルは吹っ飛び、怪我人や、死者は定かではないが、今日のインドの新聞にも載るほどのすさまじいものだったということであった。寒気がした。安全だと思っていた宿は、安全じゃなかったのだ。あと何件か宿を探し回っていたら俺達が...

マックで、マハラジャバーガーという、羊の肉を使ったバーガーを食ったあと、ネパール人（やっぱり、俺にはそう見えた）の話に、飯を食った気にもなれなかったが、リコンファームという帰りの飛行機の予約確認をしに、エア・インディアのオフィスに向かった。この辺りが、高層のオフィスビルが建ち並ぶコンノートプレイスのようだ。

エア・インディアのオフィスは、思ったよりも小さく、愛想の悪い検問のおやじとカウンターに列ぶ長蛇の列にはまいった。少なくとも2時間ほどかかりそうだったので、小松と共に、コンノートプレイスの中心部、なにやら露店の並ぶ騒がしい公園に向かった。どんなおもしろさがあるのかわからないおもちゃ、何の皮だかわからない財布、新しんだか古いんだかわからない服をさばいている店が並び、日本でいうフリーマーケットのようだった。その一角にあった、検問のおやじを越す無愛想な女主人の経営するお店、これまた、日本でいう海の家簡易レストラン。ついに俺は、インドに来る前からとって飲んでみたかった、チャーイを口にするようになった。チャーイというのは、簡単に言えばミルクティー。小松と共に「インドに」乾杯。俺が初めてインドを口にする瞬間だった。これからの20日間の旅で、俺達は何度となく、このスーパードリンクに救われることになる。

ようやく帰りの飛行機のリコンファームを終え、次は宿探しだ。マックで聞かされた衝撃的な事実が一番ビビッタのは俺で、今日の宿は俺の希望でYWCAに泊まることにする。1人600Rs。昨日の1人70Rsに比べるとおっそろしく高額だが、安全を買えれば安いもの。「荷物はホテルには置かないこと」と書かれている海外旅行ハンドブックは、俺達にはもう無意味であった。なぜなら、死ぬときは死ぬし、盗られるときは盗られるのだから。

身軽になった俺達は、まずは郵便局まで散歩。インド観光20日間、毎日、日本にいる方々に手紙を書くつもりで、エアログラムを15通ぐらい買う（最終的にそのうちの10通は自らお持ち帰り）。その後、林君は俺たちよりも早くDELHIを発つらしかったので一足先にJAIPUR(ジャイプル)行きの列車チケットを手に入れるためDELHI駅に向かい、俺達3人は、軽いデリー観光を。

ジャンタルマンタル（天文台）のある公園で、インド人カップルのいちやつきぶりが日本とあまり変わらないことに少しがっかりしながら、俺達は初めてインド最適の交通手段ーリクシャーに乗ることにした。

昨日4Rsで乗せられたリキシャと、リクシャーの違いはエンジンがついているかないかだ。しかし、やはりスピードが違うので景色の移り変わるスピードも全く異なる。そう考えると、インドの心地よい風を浴びるには、やはりリキシャが最適なのかもしれない。

リクシャーで向かう目的地は、インド門。第1次世界大戦での9万人のインド戦死者をまつる慰霊碑インド門は、DELHIの南東だ。1km10Rsが相場（BAD FRIEND曰く）であながち間違っていないようなので、リクシャーのおやじと交渉。20Rs、安い。インド2日目は、ゆったりと過ぎる。インド門についたのは夕方、公園ではしゃぎ回る子供たちを見ながら俺達も、ブランコに乗ってはしゃぎ回る。時間を気にせず公園を散歩する。

インドを食したのは、今日。コンノートプレイス中心部の高級レストランでディナーを。タンドリーチキンにナン。そしてビール。「Cheers!!」最高だ。今日は、よく眠れそうだ。生きようと思う、今この時を。今は、何よりも貴重なモノだから。

[Now, we are staying "YWCA International Guest House" Parliament St.]

<02/29(TUE)>

今日の始まりはすばらしいものだった。

林君のTouristBusが来る8時30分までに朝食を済ませる。その時、林君が俺たちにプレゼントした手品ショーは今でも覚えている。「粋」と、岡本は表現した、林君の素敵さを。2日間という本場に短い間だったが、何か心に響き合うものがあった。何かを見つけるためにインドへ。20分遅れでバスが到着し、「Good luck!」俺は林君に心からそう叫んだ。何せ、明日死ぬかもしれない国なのだから。

出逢いがあれば必ず別れがある、それは自明のこと。しかし別れがあれば必ず出逢いがある、それも一つの真理かもしれない。Bobby(ボビー)。それは突然の出逢いだった。

林君を送った後、俺達はYWCAの前で、昨日のめまぐるしい1日を思いながらしばし佇む。それも束の間、リュックを背負った“カネづる”の3人を見つけて、真っ黒い顔のリクシャー引き達がここぞとばかり営業を始める。1日でリクシャーの交渉に慣れた俺達は、もうすでにこの時間を楽しんでいる。俺達は、笑顔が一番いい彼に決めた。

Bobby's carは、快調にDELHIの町を駆け抜ける。「町」というより、3人を囲っていたのは大きな「動物園」だ。牛、リス、犬、ネズミ、インコ、猿・・・。「For Free」の動物園を抜け、俺達が着いた先は、DELHIの南に位置する『クプテウ・ミナール』。ここは、イスラム教の聖地だ。



余談だが、Bobbyはヒンドゥー教徒。現在のインドでも、宗教間の抗争は残っているが、ヒンドゥー教徒のBobbyがイスラム教徒の聖地に俺達を連れてきてくれたことは、宗教の意味が少しずつ薄れてきていることを示しているのかもしれない。その証拠に『クプテウ・ミナール』には、イスラム教徒のモスクと、ヒンドゥー教徒のモスクが混在している。大半が宗教間の争いで壊されているのだが、そこには抗争の歴史と共存の歴史が見える。しかし俺にはまだ「宗教」というものがはっきり掴めない。

俺達は、リクシャーで退屈そうに待っていたBobbyに持っていたキャンディーをあげる。笑顔が戻ったBobbyに、次の目的地を告げる。「Cheep hotel！」俺のわがままで泊まったホテルは高すぎた、だもんで小松と岡本は皮肉をたっぷりこめて、そうBobbyに叫んだ。インドに英文法はいらない。気持ちが伝わればそれでいい。みんな「Oh！ Friend」を口ずさむ国なのだから。

とにかく『ここ』は体力を消耗する。荷物が重いし、インドに慣れてはきたものの明日まで生きれるかの「不安」はまだある。『クプテウ・ミナール』を背に、Bobby's carは走り出す。

昨日、めぼしいホテルを「地球の歩き方」からピックアップしておいたが、オールドデリー付近は危険と知っていたので(昨日はメインバザールだけではなく、チャンドニーチョーク付近でもテロ事件が発生)、どの辺のホテルに行ってもらうかを3人で相談する。

「I have girl friends in Japan」「Here, This is」とBobbyが話しかけてきた。一枚の名詞を見せる。そこには、「SAITAMA-KEN～○○○子」と書いてあり、そして例の「プリクラ」が出てくる。このお決まりのパターンにもう笑うしかない。しかし、少し悲しい。「Bobbyも、これか」という気持ちだ。そんなことを思っているうちに、黒い「スモークがかった入り口」の前にリクシャーをつける。「きたね」3人でアイコンタクトを取る。考えてることは同じ、「今、この状況下をどう乗り切る??」

『ターバンの男』が、その「入り口」から登場してきたのは、そのすぐ後だ。見るからに今までのインド人とは違い、どこか紳士的な雰囲気さを漂わせていた。ターバンをかぶっているのだから、おそらくシーク教徒だろう。インドでは、少数派の宗教だ。「こんにちは。」その程度ならみんな言うことはわかっていた、「こんにちは。」俺たちも毅然と返した。「どうしました。」「ホテルですか??」「安全なところお教えしますよ。」やけに流暢な日本語。「ん??」3人でまたもやアイコンタクト。考えてることは同じ。「日本語上手すぎ。それと、この落ち着きは何なんだ?」

『ターバンの男』。半信半疑で彼の誘いに乗り、リクシャーを降りる。この後何が起ころうともインドのルールは大体わかった、「はっきりとした意思表示」これで、大抵は乗り切れる。もちろん、テロは例外だが。

旅行代理店ということは、店の中に貼ってある地図やら写真やらでわかる。そして『ターバンの男』は、ボスのようだ。彼の名前は、Sin(シン)。おそらく20代後半だろう。日本に留学したことのある切れる男。Sinは、すぐに「ビジネス」を始めようとはしない。今のインド社会の現状、世界におけるインドの位置付け、クリントン訪印、それに伴うテロ事件。多くを俺達に語る。これから社会人になる俺にとって、Sinの口から語られる多くの情報と思いは、インド観光で少し夢心地になっていた俺の気持ちを引き締めた。政治のレベルで行われる外交ではない外交がここにはある。「インドと日本、仲良くやろうや。」と。

Sinはホテルの手配をしてくれた。「ビジネス」が始まるのはまだまだらしい。「ホテルで休んで来い」そうSinは言った。そこに学ばなければいけない「サービス」があった。おそらく「サービス」とは、マニュアル化できない「思いやり」ということだろう。今日泊まるホテルは、NEW DELHI駅の西に位置する「Safety Place(??)」にある『COSMO HOTEL』。清潔なホテルで、ホテルのボーイは、小松の壊れたかばんを直してくれる。当然、CHIPは持って行くのだが。

ホテルで少し休み、お迎えの車がきたのでSinのオフィスに向かう。ここで初めて彼の「ビジネス」が始まる。今までの数日を過ごしてわかったことは、インドでの価格は、土産屋、リキシャ、リクシャーしかりで、大抵の場合は初めにふっかけてくる。しかし、Sinは違った。俺が予め計算していた価格より少し安めで提示してくる。\$300、今までのRsの単位が突然\$に変わる。3月14日までの交通費と宿泊代だ。今日が2月29日なので、半月分の生活ができる\$300で、だ。ホテルは今日泊まっているところ以上のレベルらしい。Sinを完全に信用しきっている俺たちは、15日後もしくは1日後、吉がでようと凶がでようと、どうでもいい。契約終了。運転手付きだ。日本人はインドでマハラジャになれる、そう感じた。

契約する直前に、Sinにこうっておいた。「もし良い観光になったら、Sinの店を日本でアナウンスするよ」と、Sinは当然気づいていただろう。「もし悪い観光になったら、Sinの店を日本で酷評してやるよ」ということを。脅迫じみてたかもしれないが、俺達の命には代えられない、なんせテロ日常茶飯事の国だから。

少し高い「お買い物」をした後、「FRIEND」Bobbyとドライブ。彼の案内で行ったのは、ヒンドゥー寺院だ。Bobbyはヒンドゥー教徒。この寺で俺は初めて小さい頃に見たマンガに登場するインド人風のキャラクターの額についている『赤い丸』の意味を知る。

そのヒンドゥー寺院は、有名な観光地ではなく人も少なかったので神聖な空気がした。裸足で寺院を散策する。お香、壁画、サンダルウッド粉。このサンダルウッドの粉を赤い染料で染めたものをヒンドゥー教の僧侶が聖水と共に額につけてくれるのだ。

休む間もなくBobby's carは次の目的地へ走り出す。「腹が減った。」Bobby's carに乗ったマハラジャ3人は、わがままを言い放題。レストラン街で止めてくれた。Bobbyも一緒に食わないかと誘ったが、外で待つと言った。まだインド人の思考回路が読めきれない。Bobbyが、店員からCHIPを貰ったのだけは見えた。「マトンカレー」は、うまいビーフ感、「ボイルドライス」はまずかったことだけは記憶している。余談だが、インドでビーフはタブー。牛は神様。昨今の狂牛病により、日本もタブーになる日も近いのだろうか。次は、Bobbyの希望で「土産屋」。Bobbyは「見るだけ、ね!」と語った。お決まりの日本人観光客対応の教科書通り。店に入った俺たちも連発「見るだけ」。そして、ふとBobbyを見ると、店員からのCHIP。

この土産屋の後、俺達は素直に見たインド社会について話した。ある一面のインドは、「チップ」「喜捨」「マージン」、これが今のインド社会では「お決まり」の習慣かもしれない。しかし、『「誰かの親切」に対しお金を払う』という単純な構造がそこにあった。そして、そんな話はお構い無しで、排気ガスの中を笑顔のBobby's carは駆け抜けていく。

インドでは日本車が数多く目に付く。「スズキ」「トヨタ」。ニューデリー北部、有名な「ルールキラ城」に警官が余りにも多いことを不安がりながら観光。「ルールキラ」を後にして、俺達は大統領官邸前で記念写真。

Bobbyが俺にむかって、そのどこ製かわからねーcarを運転してみないかと言う。Bobby's Driving manualで運転方法を教えてもらい、少々ドライブ。Bobbyは、俺達にあだ名をつけた。岡本は「アマル」。小松は「アクバル」。俺は「トミー」。後から聞いたが、「アクバル」は、クレイジーらしい。



ガンジーは偉大な人であった。非暴力主義。紛争解決、外交問題解決の手段に、「武力」が相変わらず用いられる世界で、彼は非暴力による外交を訴え、そして実践してきた。ガンジーが銃弾に倒れた時、彼の財産は粗末な服と鼻紙だけだったようだ。日本の足尾銅山鉱毒事件で闘った田中正造もそんな死に方をしている。ガンジーは、自分の生き様を後世へのメッセージとしたのだ。『Truth is GOD, My life is my message.』俺は、そんなことを思いながら、ガンジーメモリアルを後にした。

そういえば、インドで買っておきたいものがあった。紅茶だ。邦画「恋と花火と観覧車」に登場した「ゴールデンチップ」というのが欲しかった。後から考えると、もう少し値引き交渉に慣れてから買ったほうが安く買えたようだった。30Rs(約¥100)値切って、2コ¥1,000。荷物になるだけだった。

そんなこんなで、3日目のインドが終わろうとしていた。小松が行きたいところがあると言う。『Museum Hall』インド舞踊。これ以降、小松の勘に頼ることにした。

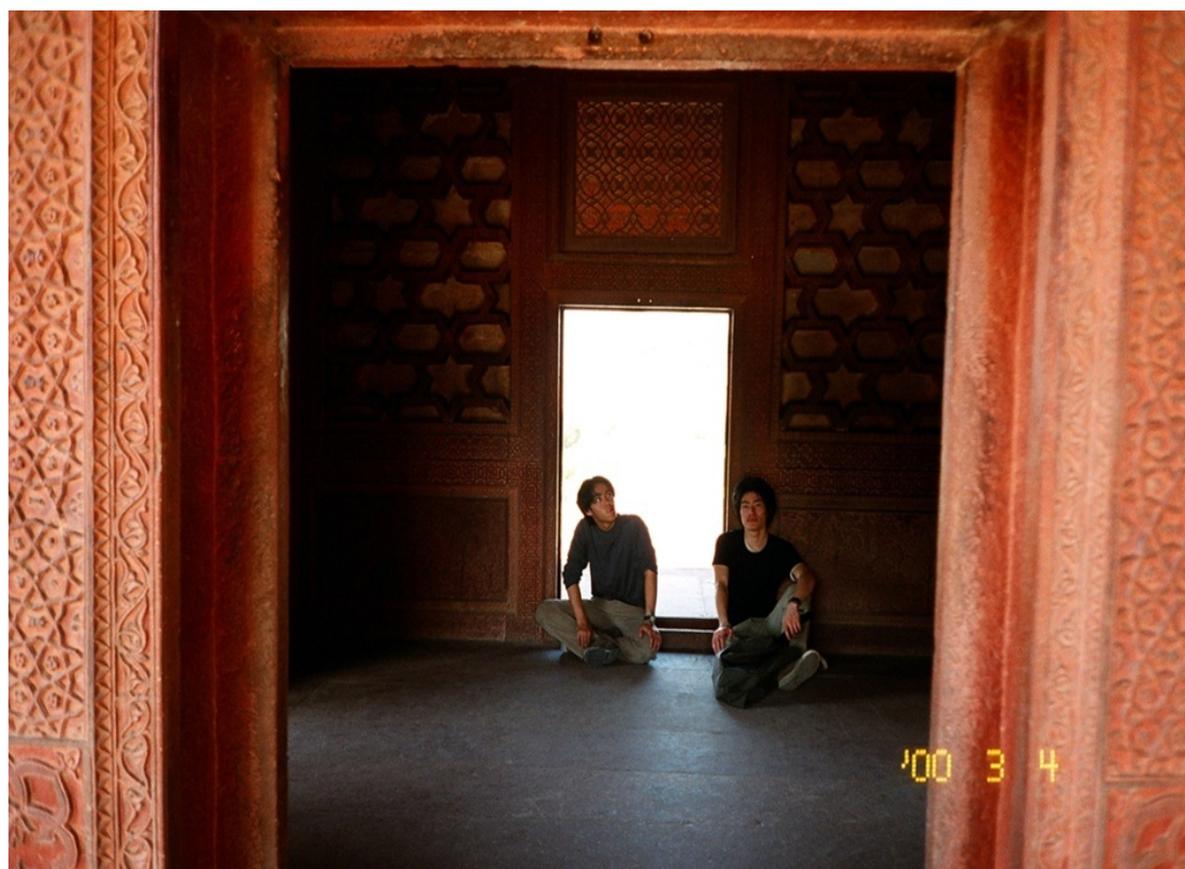
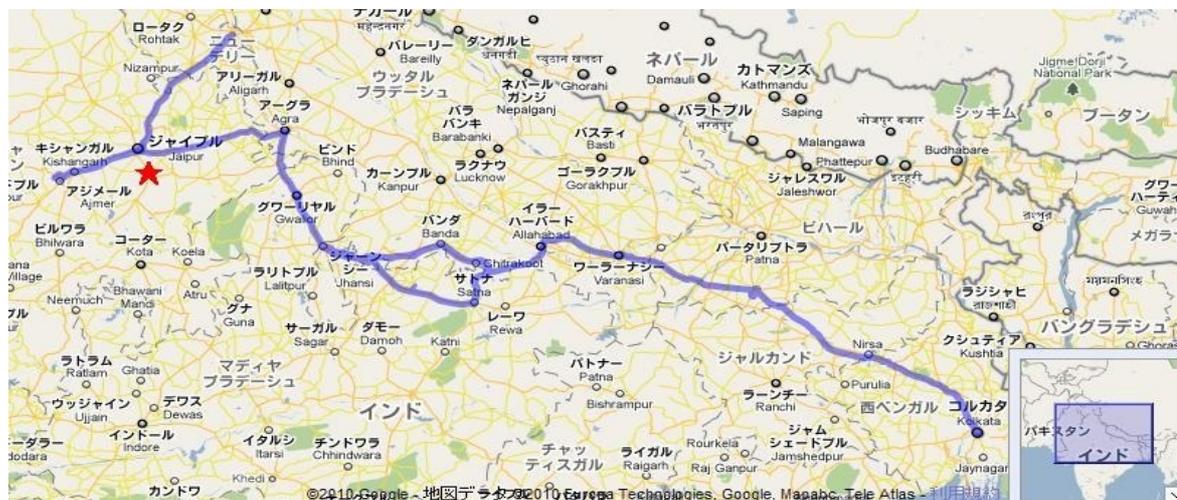
少々埃臭い小さな舞台で、インド音楽に舞う踊り子を見た。

その幻想的な空気の余韻に浸りながら、俺達はいつの間にか眠りについてた。

[Now, we are staying "COSMO Hotel" CHANNA MARKET]

## 第2章 JAIPUR (ジャイプル)

# 第2章 JAIPUR (ジャイプル)



<03/01(WED)>

8時半にDELHI(デリー)を出発した。リキシャやリクシャーと違って、ミニバンは速い速い。インド初の都市から離れ、これからまた違ったインドに出合えるのかと興奮した。ミニバンは、木が生い茂っていない砂漠の山々を、猛スピードで越えていった。小松と岡本は、相当の車の揺れも気にせずに、ぐっすり眠りについていた。

JAIPUR(ジャイプル)は、ラジャスターン州の砂漠の国だ。木が生い茂っていない山々は、グランドキャニオンを彷彿とさせた。湖の上に幻想的に浮かぶパレスは、あまりにも美しい。DELHIでは惹かれなかったが、グランドキャニオンの山の頂に散見される都市部を守るFORT(長城)は、あらゆる外敵を防ぐというその機能性よりも、むしろとても芸術的だった。

Sandium(サンジウム)はいくつだろう？ふと、そのミニバンの運転手の年齢が気になった。見た目は30ぐらいか、堂々としたツアーコンダクターだ。疲れを見せないStrong男でもある。俺達が飯を食っている時、彼が何をやっているかは不明だ。店からCHIPを貰って、どこかの定食屋で飯でも食ってるのだろうか？

そんなことはさておき、どうやらDELHIの次の都市に着いたらしい。桃色の町は、空気が思ったよりキタナク感じた。PINK CITYと呼ばれる、ここは観光都市だ。

着いて直ぐ飯を食った、Richな暮らしぶりが何か違うような気もしたが。タンドリーチキン、いつものやつ。

『City Palace』風の宮殿は、入場料150Rs。DELHIの『ジャンタルマンタル』は、4Rs。どうやら観光都市と住宅街の違いは歴然のようだ。『City Palace』で、日本人より日本語に慣れているオヤジに合う。オヤジが紹介したのは、例のごとく土産屋で。土産屋には、シルクのスカーフとコットンのスカート。ともに\$10。エローい感じのスカートだった。岡本は後にこう言った。『ヤラシイネ、インドジン』



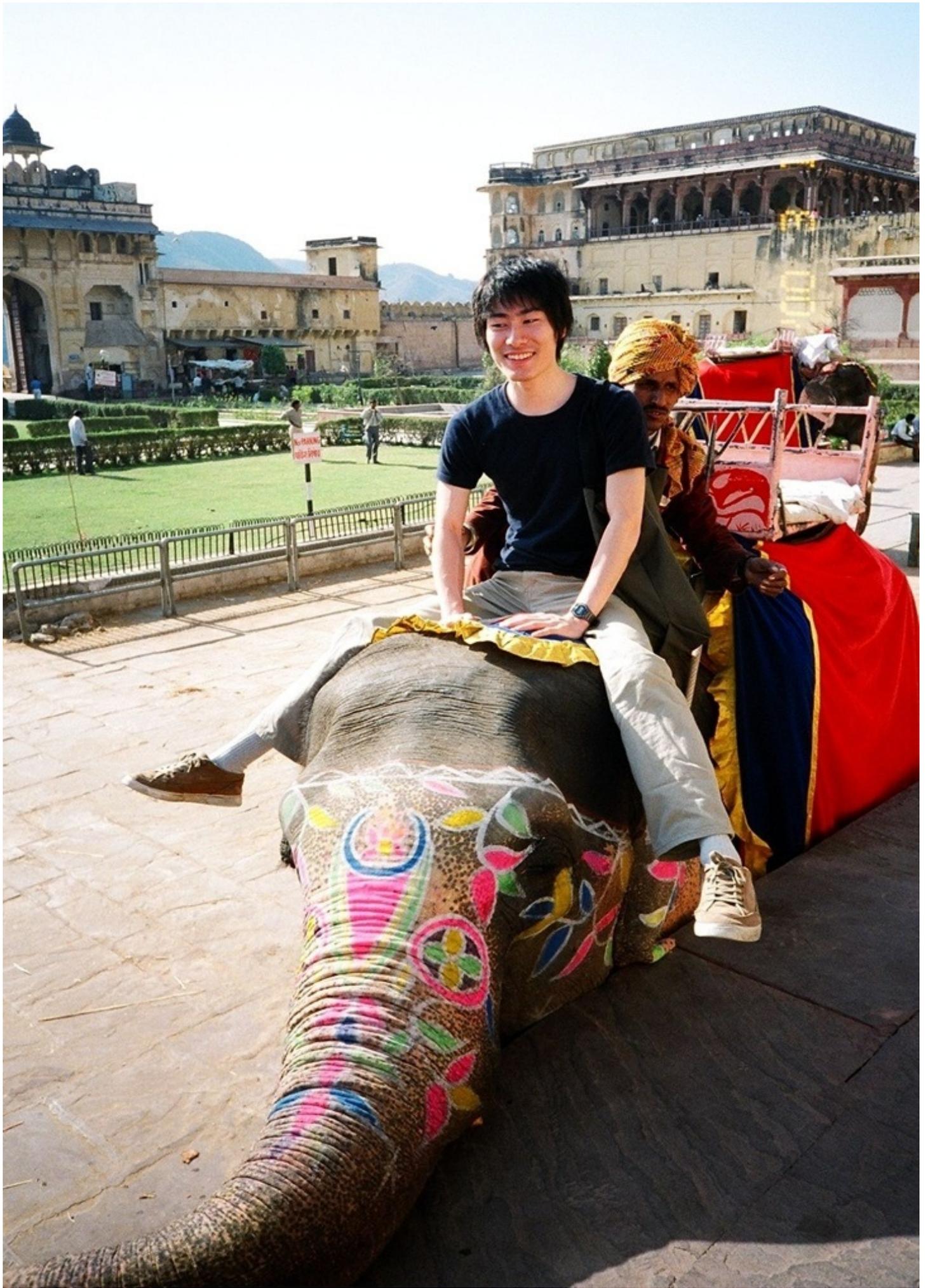
この国には『ヤラシイ』ではなく『ヤサシイ』人も多い。What is a life , job , myself , friends and so on. 少しずつ考える。街中に並ぶ、へびの置物、ピーピー笛、猿回し、…。仕事はいくらでもあり、大人、子供に限らずビジネス。インド人はおそらく賢い、そして積極的だ。自分の能力を存分に活かして生きている。否、生きているではなくて、生き抜いている。今を楽しんでいる。

さて、生きるとは何か。今日は、HOTEL Mahalani Plazaにて休むことにする。俺たちは今日も、ホテルの名前の通り、マハラジャ気分です。

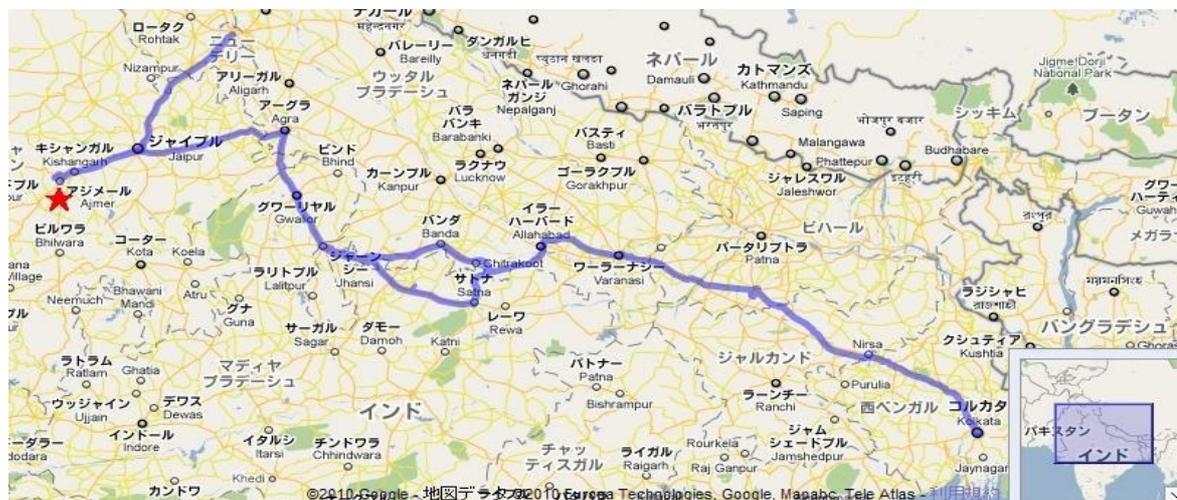
[Now, we are staying "HOTEL Mahalani Plaza" Sindhi Camp Bus Stand.]

<03/02(THU)>

JAIPURを1つの観光ポイントとして選んだのは、象のタクシーに乗りたいたからだ。今日は山頂にそびえ立つアンベール城まで、その動物タクシーに乗った。ここも、AGRA(アーグラ)でおそらく見学するタージマハルと同じ、大理石(Mavel)でできている。城というよりは動物園であったのだが。感動はむしろ、タクシーに乗ったことよりも、象から城の下、アンベールレイクを望む壮大な景観であった。その景色は、岡本が象使いに突き落とされかけた恐怖を忘れさせた。



# 第3章 PUSHKAR (プシュカル)



## 湖の畔の生き物(者)たち

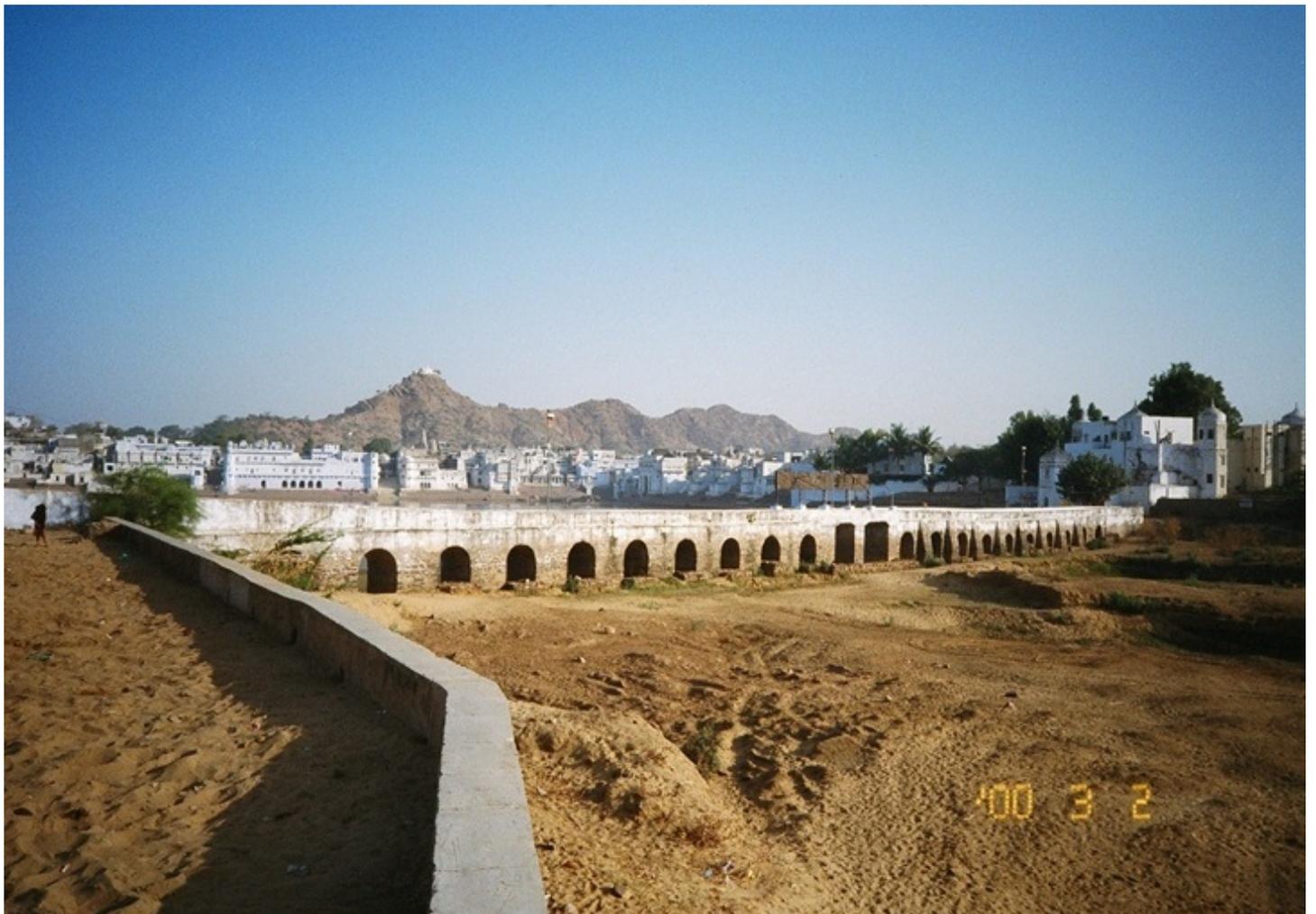
<03/02(THU)>

TOURはとにかく忙しい。Sandiumは疲れを知らない男。たまには、観光じゃなくて、散歩でもさせろっつーの。

インド人の人懐っこさと優しさは何だろう。これがまずは俺がインドから獲るもの？

JAIPURからPUSHKAR(プシュカル)への道のりは車で3時間。その途中、対向車線に止まっているミニバンはパンクしていたらしい。Sandiumはホーンを鳴らす。「大丈夫かい？」の合図。ミニバンの運転手は笑顔で手を振った。一人一人が、一人で生きていくことも確かだが、それは一方で孤独というわけではなく、助け合いながらだ。

インドの町は、町毎にかなり違った表情を見せる。PUSHKARは人口の少ない白色の町、町の人たちは全員が友達のような感じだ。後からわかったことだが、ここはヒンズー教の聖地だったのだ。まんじゅうやら木彫りのよくわからんアクセサリーやらの露天商がいるものの、金持ち日本人を相手にせず、各々に隣の露天おばちゃんとかくっちゃべってる。Sandiumは、俺達を湖の宮殿に案内する。これが俺達の宿か。インド1日目とは比べられない豪華さだ。俺ら、インドではマハラジャ、か。



夜、岡本と満天の星空を見た。少々、逢いたくなる、同じ星を見ている日本の誰かに。

今日、寝付けない。町で逢った少女の言葉も気にかかる。「バクシーシ」ではなく「マハラジャー！チップ！」と声をかける少女。俺はチップをあげるべきなの？みんながあげるからそう言うの？

いいやいいや、明日はラクダだ。朝、5時半起きです。

[Now, we are staying "Hotel Pushkar Palace" Near Pushkar Lake.]

<03/03(FRI)>



朝もやの中、ラクダJourney3時間。大自然の空気を思いっきり吸った。喉にかすかに冷たい水がつたつたような。

ラクダから見下ろした住宅地に、昨日出逢った少女と同年くらいの子供がいた。「ジャパーニ！」。そう呼ばれるときは、金づるとカモにされると思ったから、「I'm Korian！」と返した。そしたら、その少女は、こう返した、「GAKUSEI-BINBOU！」「学生貧乏！」。俺は、この旅でほんとに成長できるの？少女に見透かされた悔しさと、少女にその言葉を教えた日本人のお気楽さ加減にまいった。

車はミンチレースだ。Sandiumというより、インド人の運転は小松より荒い。追い越しするのが標準だ。インドにはサイドミラーが無いの知ってました？みんな外しているのだ。なぜか？

擦れ擦れで追い抜いて、とにかく早く目的地に着きたいから！サイドミラーがもう無いから、後ろから来る車は、視覚では判断しない。聴覚。そう、昨日Sandiumが路肩のミニバンに優しく投げかけたホーンが、今度は強さを増して響く。「ブー！ブー！（追い抜くぞー！！）」

SandiumCarは、颯爽とグランドキャニオンを駆け抜け、既に桃色の町、JAIPURに戻っていた。Sandiumが連れて行ってくれた博物館は休館日。門前に立つ少年に笑われた。



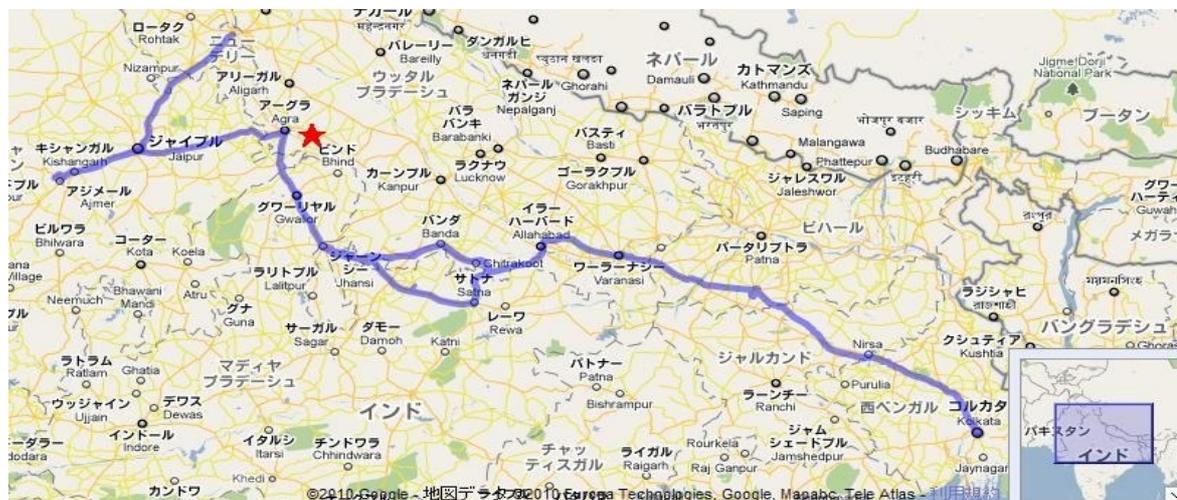
なもんで、俺達も踊るインド人を笑ってやった。

映画の名前は「KAUFF」(カフと読む)。意味はタフ野郎。インド人の娯楽はこれか、というくらいに、JAIPURにはこんなに人が住んでたのか、というくらいに、映画館に町中の人が集まっていた。「Korian！」と言ってもバレバレの日本人3人を食い入るように見る。さも「インドの映画にびびるなよ」と。笑うね、こりゃ、びびるよ、インド映画。「KAUFF」に出てきた俳優は、銃を撃ちまくり、そして案の定、踊っている。言葉はわからない。22歳の経験値は、会場の空気から、その物語を読み取っていた。日本の映画館は客席が静か。ところがインドの映画館は、“客席も”騒がしいのだ。キスシーンで、客席の女性が声を出して目を覆ったのと、その声を覆い隠すように、会場全体からの、太い声の長いため息。俺はこのリアクションにつっこみたくなった、おいおい、俺が唯一自分のお土産に買った「カーマーストラ」(インドの性教本)の中身はそんなもんじゃなかったはずだぞ！と。

[Now, we are staying "HOTEL Mahalani Plaza" Sindhi Camp Bus Stand.]

## 第4章 AGRA (アーグラ)

# 第4章 AGRA (アーグラ)

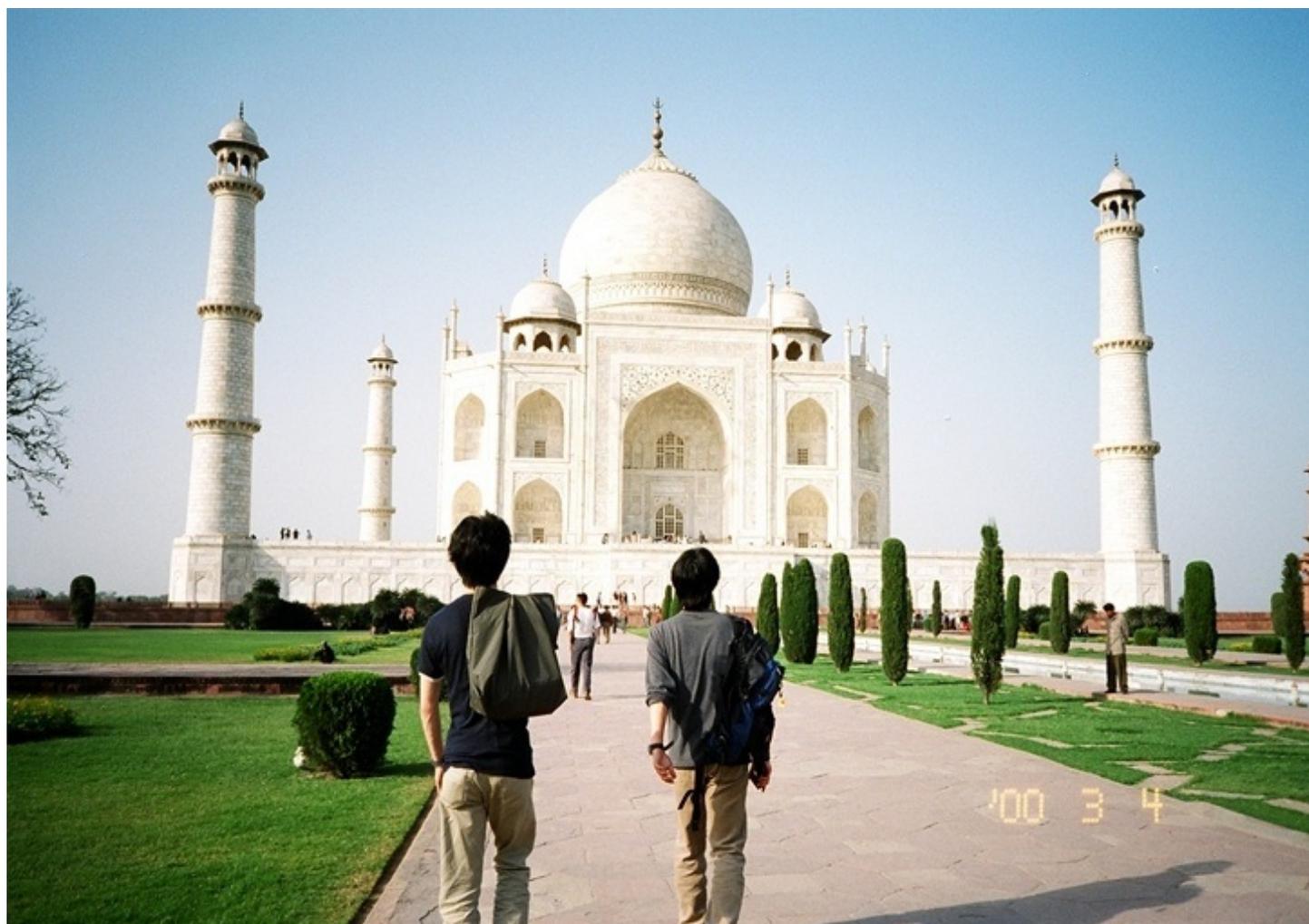


## 傾国の宮殿

<03/04(SAT)>

昨日と同じようだ。Sandiumのミンチレースは相変わらずハードなものだった。インドの超有名観光スポットに向かう途中、車を花で着飾った一団を見た。400年前にここAGRA(アーグラ)で惹かれあった男女の遺伝子は、現代に生きるインドにその面影を残す。結婚式らしい、とってもNICEな。

インド全土を初めて統一したムガル帝国の王子ジャハーンが恋したタージマハルは、彼が即位した3年後に死ぬ。悲しみの淵にあった王子は、帝国の国力を傾け、インド中の宝石をその墓に埋め込んだ。悲しいかな王子は、その息子に幽閉され、生涯対岸からタージマハルを見続けて息を引き取る。



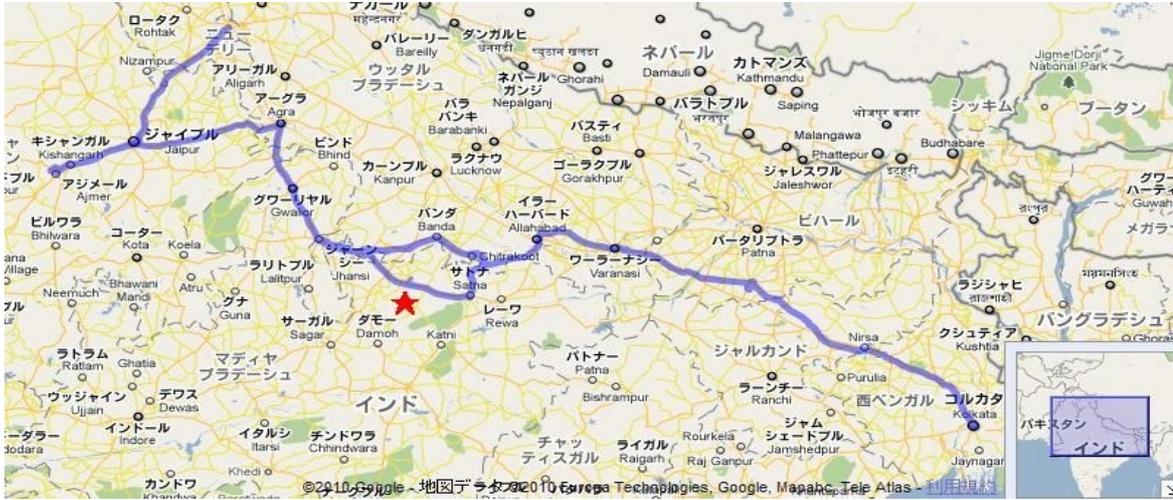
その宮殿を見た俺達の印象は、こう。「美しい、きれいだ、女性。やらしい。エロス。ジャハーンはエロかったんだよ、たぶん。まさに女性器だろ、これは。」



明日はSandiumとお別れ。贈り物を何にしようか。

[Now, we are staying "HOTELAMAR" Tourist Complex Area, Fatehabad Rd.]

# 第5章 KHAJURAHO (カジュラホ)



<03/05(SUN)>

夜8時、電車は激しく揺れる。朝の4時か5時に、列車はSATNA(サトナー)に着くわけだが、はたして眠ることができるのだろうか。俺一人だけ、立ちながら苛立っている。俺が座る予定のシートには、無表情のおやじが座っている。そのおやじ(仮に“アクバル”としよう)は、俺の向かいのシートのおやじ(こっちは“アマル”)とは知り合いのようだ。無表情のアクバルに「オレが予約したシートだ！」と言っても聞く耳を持たない。小松と岡本に上の寝台シートを取られたので、俺は下のシートに寝る"予定"だ、相変わらず。この分だと、予定が、確定しそうにない。とにかく、アクバルは、無言で飯を食っている。彼が唯一発した言葉は「LUNCH」。「昼飯を食っている」とでも言いたいらしい。その発音はいやに長く。この20時の「昼飯」に、つつこむ気にもなれなかった。

相変わらず電車は激しく揺れている。夜のLUNCHを食った後、彼はやっと自分のシートに消えていった。このやり取りで俺まで腹が減ってきたので、Sandiumがお土産にくれたバナナをほおぼる。小松と岡本と、ついでにアマルに向かって言ってやった、皮肉たっぷりに、「LUNCH」。

昼間、アーグラ城のでかさに驚き、そこから見えるタージマハルは、晩年ジャハーンが過ごした塔から、とても美しく見えた。AGRAは結婚式が多かった。結婚に向かうお嫁さんの行列では、みんなダンスしていた。HAPPY。

Sandiumは15歳の時に、インドの北からDELHIへ出てきた。トラックドライバーを経て、今の仕事に就いたようだ。当時は、3時間、4時間という睡眠で働いていたと言った。そんなことを思うと、さっき、ほんの数十分間、空かないシートに苛立っていたのが自分が、アホらしくなったわけで。Sandiumに「負けてはいられない」

そういえばAGRAで、自分への土産を買った。インド式エロ本「カーマストラ」。土産屋のおやじは、うれしそうに、人前では話せない言葉を教えてくれた。「ジキジキ」=SEX。インドでにやつきながら「ジキジキ～」と言っていれば、大抵の悪徳商人とFRIENDになれる。ただ、KHAJURAHO(カジュラホ)で、これを使った時には「お前はそんなにやりたいのか」と言われた。使い方を誤らないように。

揺れは激しさを増す。そろそろ、寝るか、向かいのおやじも寝たことだし。

朝、4時半に目が覚めた。おそらくSATNAに着くのか、列車内が騒がしい。他の乗客にまぎれ、例に漏れず、俺もトイレへ。インド式トイレはもう慣れた。ベンキとバケツ、紙は無し。バケツに水を入れて、左手で水をすくってケツを拭く。

列車の揺れは変わらない。小松と岡本とアマルはぐっすりだ。窓の外にはインドの一日のはじまりが映し出される。列車は川岸に沿って、遠くに岩むき出しの山々を望みながら、畑の中を突き抜ける。その映像には、動き出したインド人の朝の喧騒が埋め込まれている。牛のケツをたたき朝っぱらから農作業をするおじさん、川で水を浴びている老婆がいると思ったら、その横で洗濯をしている婦人、あちこちに朝の炊事の煙が見える。美しい。昨日見たムガル帝国の最高傑作に引けを取らない。列車は揺れと大きな音を立てて、その美しい生活の中を突っ切る。

インドの夜は真っ暗だった。今の景色がうそのように、光もまったく見えない暗闇だった。そういえば、一晩中トイレの前に座っている係員が、寝る前にシーツとブランケットを貸してくれたが、ExtraBedに金がかかることを知っていたせいか、そばにいる乗客に「This is for free?」と尋ねた自分を思い出した。俺は、ぼーっと外を眺めている。

向かいに目覚めたアマルが、俺をじっと見ているので、その間が嫌だったので、SATNAに何時に着くのか聞いてみた。「8時」ということなので、さらに岡本と小松もぐっすりなので、俺ももう一眠りすることにしよう。

## コイン戦争とグリーンピース

<03/06(MON)>

8時半にSATNAという駅に着いた。あやゆる荷物を運ぶ人の行列で何やら騒々しい。KHAJURAHO行きのバスターミナルへは、バスからリクシャーを利用するのがよいということで、20Rs!と主張していた少年、おそらく15歳ぐらいのリクシャーでバスターミナルへ。着いてすぐ、今度は違う少年に話しかけられる。"Smile is good!!"と言ったSandiumの言葉通り、その少年の笑顔もよかったので、ついて行った。KHAJURAHO行きのバスは9時半。バスは、まあ、おおよそ時間通りに来た。

少年は、バスが来る前から「コインをくれ」とSmileで言う。インドの珍しいコインを見せる。しまいには、友達が登場し、しきりに「another coin!!」と言う。しかたないから、日本円サイフから、1円、5円、10円、...。50円、100えん...。まで、は俺も快く換えた。が、500円は、帰りの成田空港から横浜の最寄り駅までの電車賃のこともあったので、遠慮した。「ん〜、きみ、500円(=200Rs)は、インドで3日も過ごせるのだぞ!」。バスがもう来る、バスに乗れば、彼らも他の獲物に行くだろう。これは大間違い。まず、彼だったのが「彼ら」になっていたのと、その好奇心は俺らの予想以上だ。昨日買ったエロ本を見せるや、大興奮。さらに、ターゲットを小松と岡本にして、コイン戦争は続く。



バスは相当走った、気がした。といっても、300Kmぐらいか。長く感じたのは、道が、道とは言えないものだったからかも。ここも、辺りは動物園だ。

4時間の激しい揺れのあと、車があまり走っていないKHAJURAHO村に着いた。ここは“村”だ。バスを降りてすぐ、数人のリクシャーが声をかけてきたが、ホテルまで1Kmぐらいだったので、久しぶりにリュックを背負って歩いた。ホテルは今までの町のホテルとは打って変わって1F建ての平屋だった。部屋はまあまあだったが、フロントのマネージャーの態度はあまり気に入らなかったのを覚えている。

部屋に着いた。小松と岡本は、列車とコイン戦争とさらにはバス地震疲れのせいかな、すぐ眠りについた。俺も疲れていないわけではなかったが、ベッドを占領されていたのと、残りの手持ち資金が気になっていたのも、おちおち眠る気になれなかった。少しぼーっとしてから、両名に話しかけたが、気づきもせず爆睡していたので、一人散歩に出かけた。

澄み切った青空ゆえに日差しは容赦なく照りつけている、これが体力を消耗させる、ただ、人が少ないこの村は、その静寂が、今までの都会とは異なり新鮮で気持ちよかった。

100m程歩いたか、静寂が無くなった。というより「あ、また、これか。インド人営業が始まった」と思った。今出てきたホテルの入り口から、すごい勢いで走ってくる男がいる。外見上から明らかなインド人。「すいませ〜ん、ちょっと、待って〜」あとからわかったのだが、どう見ても同い年(22歳)には見えない。やはり、こいつもSmileを持っていた。

Kam(カン)さんは、日本語を話せる友人や日本人観光客から日本語を盗んだらしい。口癖は「ごめんなさいね」。これを言う理由は「日本人客を狙うインド人がインドには多いこと」。だから、インド人を代表して(彼曰く)「とにかく、ごめんなさい」。Kamさんはレストランのアルバイトをしている人で、今日と明日は休日だと言う。

俺は一人ということもあつたし、日本語をしゃべることを不信に思っただけはいたが、彼の腰の低さ加減に笑いがとまらなかつたし、サイフには現ナマがなく取られる心配も無いので、とりあえずついていくことにする。今までに無い形態、“歩き”だ。

途中、Kamさんの友達がたくさん彼に話しかける。そして、道端のグリーンピースの莖を拾い、豆と一緒に食べる。そして、何粒か食った後に、そこら辺の人に莖ごと投げる、そして、また拾う、食べる、投げる。拾う、食べる、投げるの繰り返し。そりゃ、俺も笑いがとまらねーよ、Kamさん。そんなことをしているうちに、にぎやかな場所が近づく。今日は、そう、KHAJURAHO村の祭りらしい。

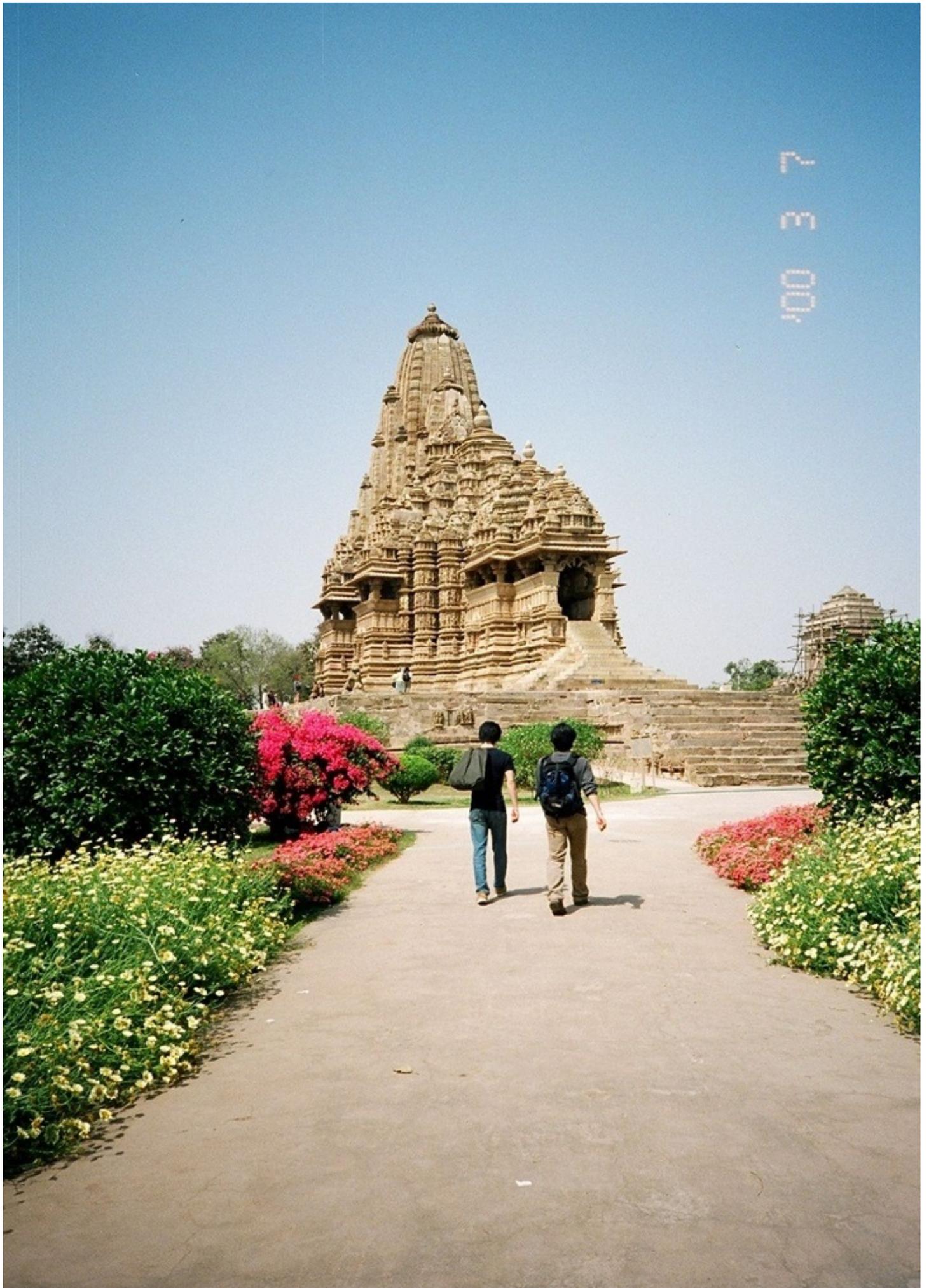
そういえば路肩の人たちはみんながみんな着飾っている。Kamさんが、草を掻き分けて小道に入る。今度こそ何かあるなと不審に思いきや、抜けた先に広がった荒地には、なんと遊園地ができていた。観覧車を取り巻く周りには様々な屋台が立ち並ぶ。お菓子屋さん、おもちゃ屋さん、射的屋。お祭りと遊園地の融合、まさにそんな光景だ。俺の疲れは、この雰囲気とKamさんにおごってもらったチャーイで吹っ飛ぶ。3時間ぐらいか、Kamさんと遊んだ後に、少し得をしたような気分でHOTELに戻る。今度は、熟睡中のカモ二人を叩き起こして、KHAJURAHO村のフェスティバル会場へ。毎年、この時期は、ヒンズー教のシヴァの結婚祝賀祭が行われるそうだ。だから村が賑やかだったのだ。フェスティバルでは、19時から21時まで野外の会場で、KHAJURAHOの寺院群に向かってステージがある。DELHIで酔ったインド舞踊とはまた違った雰囲気があった。KHAJURAHO酔いが醒めないまま、Kamさんがバイトしている店「レストランブルースカイ」で夕食を。メニューも店名も日本語で書いてある。俺が頼んだのは、「サクラテシヨク」(みそ汁、ごはん、野菜炒め)日本食におさらばして何日になるだろう、勢いよく箸を入れる。が、これは日本食じゃない、当たり前か。見た目だけ。懐かしんだ。やっぱり、インドでは、インド食を食うことに決めた。カロリーメイトも1日目で充分だ。Kamさんと、Kamさんの友達、それに小松と岡本。ラム酒で乾杯！最高だ。

バスを待っている時、バスに乗っている時、列車に乗って人と触れる時、列車からインドの生活を眺めたとき、村を歩いている時、グリーンピースをほおぼるおっさんを見た時、様々なインド人の生き方に触れる。それは、とにかく生きろと、あなたなりに生きろと、あなたの持ち味で生きろと、俺に語りかける。DELHIで出逢った偉大な人の言葉は、"MY LIFE IS MY MESSAGE"。ただインドが俺に語ったことのひとつは、"Indians' lives are their messages" "Your life is your message！！"

[Now, we are staying "HOTEL JANKAR"]

<03/07(TUE)>

今日もKamさんとだ。何で今、3人とも自転車に乗っているのか、その理由はあまり覚えていない。とにかくKHAJURAHO観光は今日で、しかも、その村を4台のチャリンコが駆け抜けている。先頭はグリーンピースのおっさんだ。もう既にKam's TOURのスケジュールが走り出していた。夕方の滝で、締めくくるこのTOURの昼間の部は、妖艶な寺院観光だ。



2 3 001







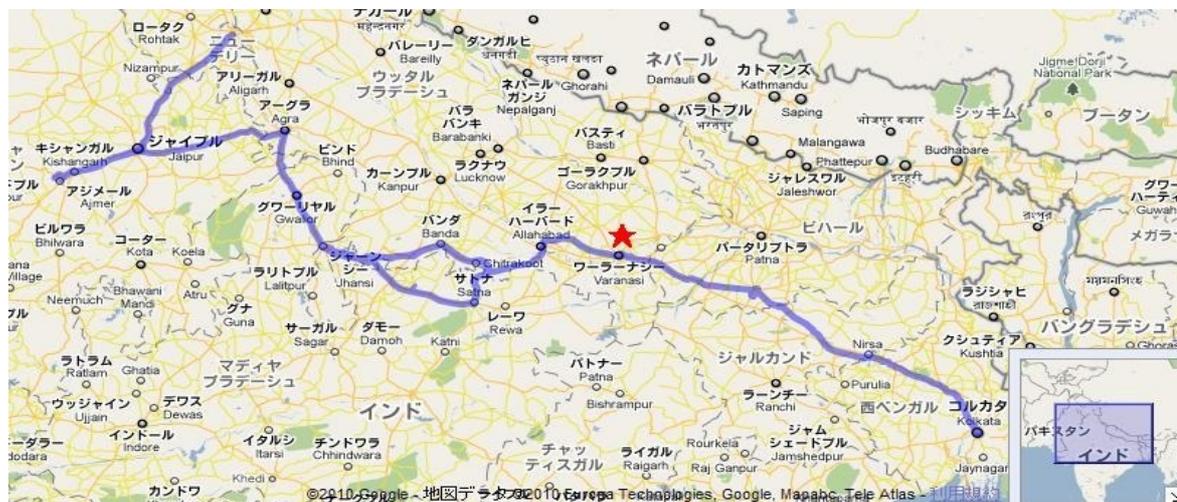


滝で、Kamさんの友だちに「キミかわいいね」と言われたことを思い出した。滝を見るには見たが、絶壁がすげ一怖くて、写真にも写せなかったことと、言われた台詞にケツを押さえてびくびくしていたことも思い出した。そういえば、その友だちに、にやつきながら「ジキジキ～」と言ってしまったから、「女、買わない？」と言われたことも思い出した。300Rsだと。物価が安いことを、いまいち何の尺度で測ったらいいかわからなくなってきた。

今日、女にも、男にも手を出さずにすんだ。

[Now, we are staying "HOTEL JANKAR"]

# 第6章 BANARAS (ベナレス)



## THIS IS REAL.

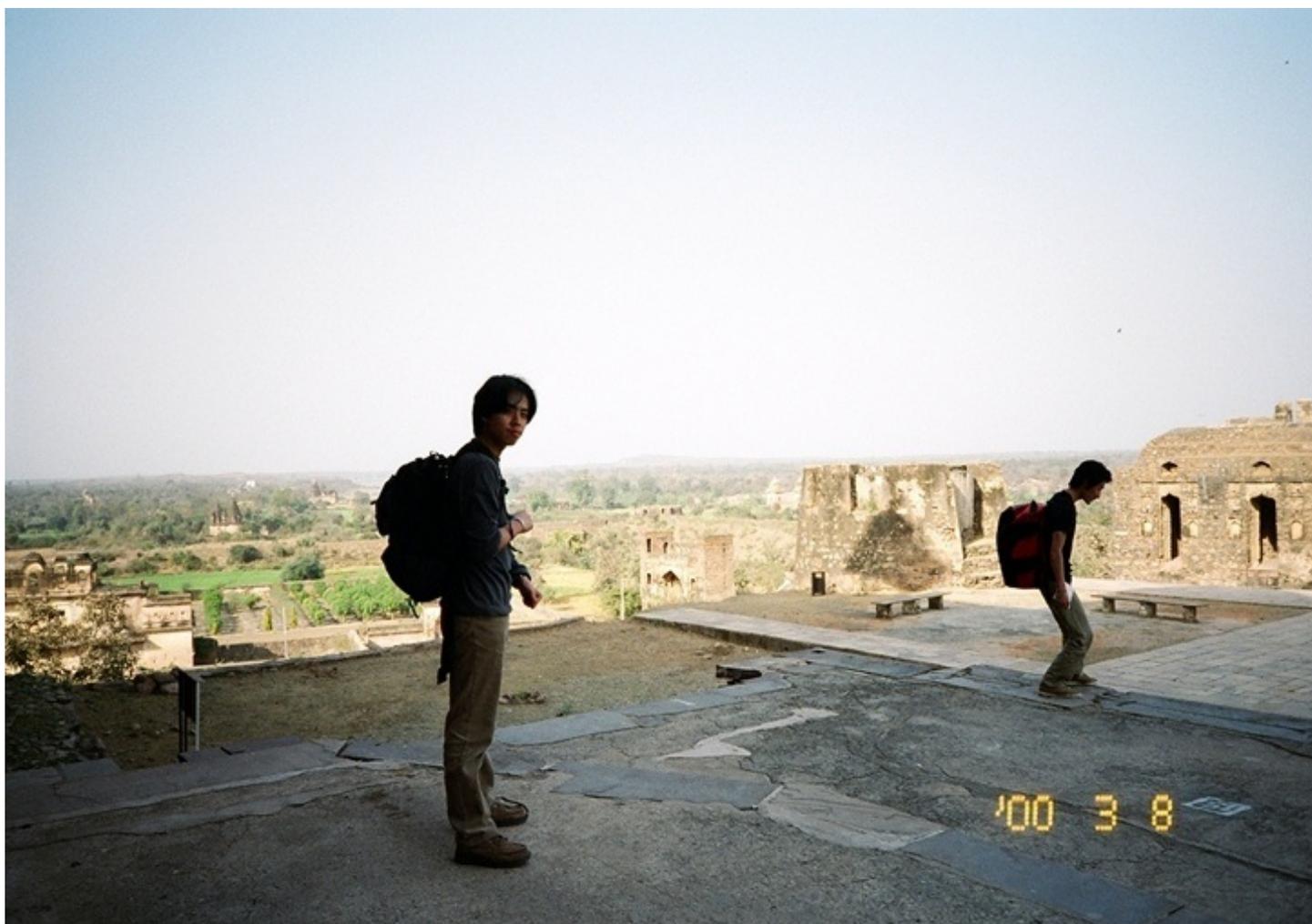
---

<03/08(WED)>

朝9時のJANSI(ジャンシー)行きのバスに乗るため、8時半にHOTEL JANKARを出る。

KHAJURAHO行きのSATNAからのバスよりも、心地よくバスは走った。インドと日本でただひとつ変わらないのは子供の笑顔。「HELLO!!」と声をかけてくれるその笑顔、どこへ行っても子供はかわいい。

JANSIに着いたのは14時前後、遅い昼食をすませ、19時20分発のBANARAS(ベナレス)行きの列車まで時間があるので、近くのオルチャ遺跡へ行くことにする。オルチャ遺跡の造りは、岡本の言うようにJAIPURの風の宮殿に似ていた。ラージプート族の形式なのかもしれない。インドは、それぞれの場所で違った顔を見せる。何とも言えず俺達をワクワクさせる。そして。毎日、何人ものインド人と話しができる。そしてこれもまた、何とも言えず。



そういえば、インド人は穏健で、喧嘩らしきものを見たのは、DELHIに着いた日の夜のバスターミナルでの殴り合いと、今日のバス中での怒鳴りあいくらい。



今、乗っているEXPRESSは4人のコンパートメントで、以前乗ったものより快適に眠れそう。夜の「LUNCH」おやじも居ない。ただ、気になるのは、小松の下に居る、ずーっと本を読んでいる無口なインド人と、約5匹の蚊ぐらい。

[Now, we are staying "BUNDELKHAND EXPRESS"]

<03/09(THU)>

寒い。列車の中。朝、寒さで目が覚めた。以前よりも、ランクが上のはずの車両だが、なぜだかブランケットを貸してくれなかった。

インドの朝は早い。日が昇ると同時に町が動き出す。駅は朝から活気づく。「チャーイ！チャーイ！チャーイ！」の声、犬の喧嘩の声。

BANARASに着いたのは昼12時。16時間の夜行はバックパッカーばりの表情になってきた俺らでもきつかった。それに昼は暑い。駅を降りてからの客引きももう慣れた。ホテルの誘いと、破格のリクシャー代。教科書通りで、駅を少し出て歩けば、止まっているリクシャーは安い安い。

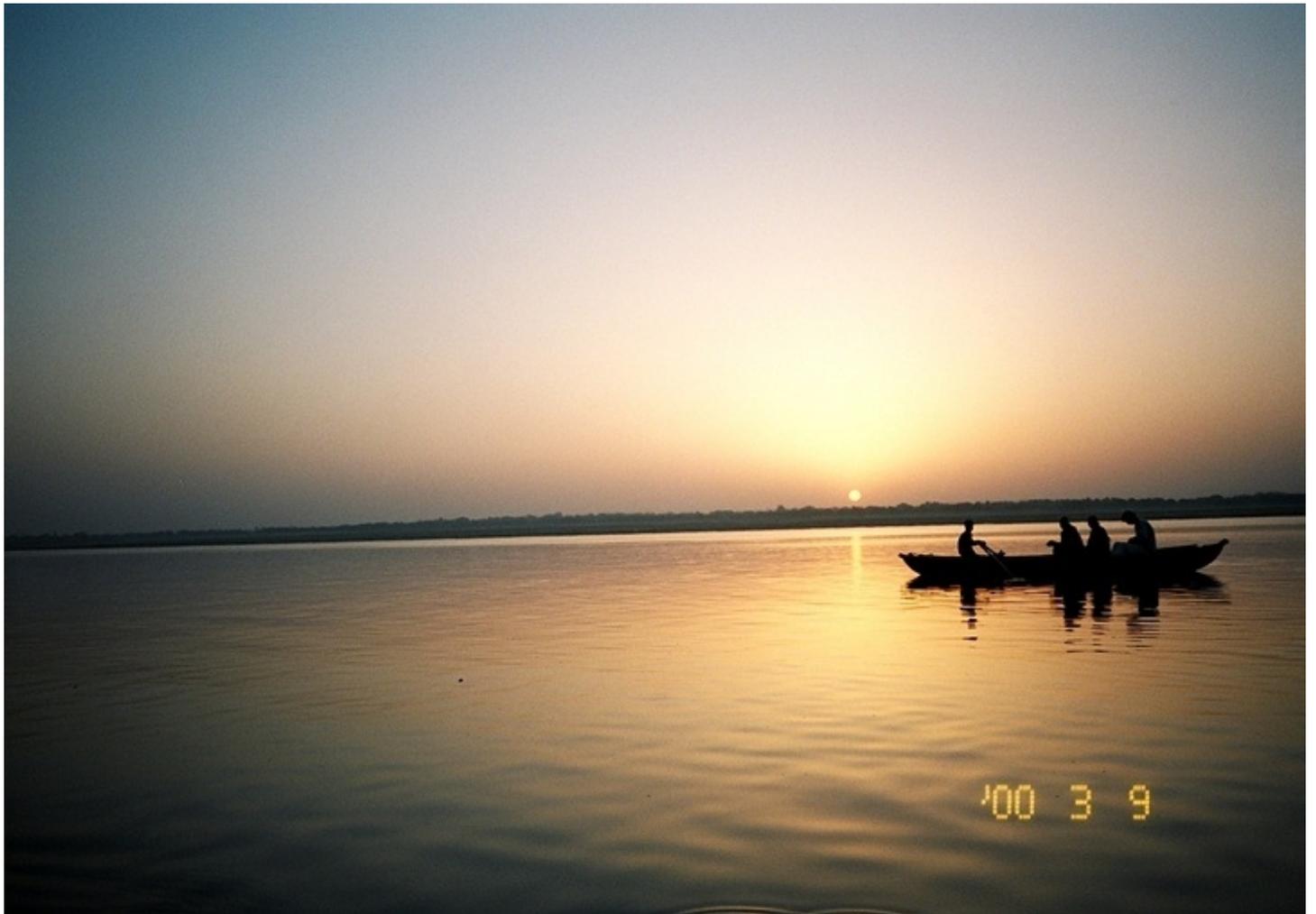
夕食は、町のおじさんに教えてもらった、安いベジタリアンのレストラン。30Rsだったのが、辛いのと口に合わない(要するに、まずい)ので、食えなかったのを覚えている。セブンアップを飲みすぎて、その味しかなかったような。その後、そのおじさんの店で、サンダルウッドのネックレス。AGRAで、気合いで値切っても400Rsだったのが、ここでは210Rs。独特の香り。

明日、朝、聖なる川、ガンガー。5時半フロント前。そろそろ寝るか。

<03/10(FRI)>

みやげ屋は必ずと言っていいほど「This is real (ホンモノ)!!」と叫ぶ。昨日のサンダルウッドのネックレスも「real (ホンモノ)」と信じたい。

今朝、5時半起きで、ガンガーへ。日の出前のガンガーは薄暗く、冷えていた。ボートこぎの14歳の少年は、岸にある数々のガートや建物の説明をしてくれた。建物の多くが私有物で、JAIRURの王だとか、イタリア人富豪が買い求めたものらしい。





川岸では、沐浴者や修行僧がおり、日本人の青年もいた。ヒンズー教の聖地中の聖地ということだが、あまりにも多くの観光客を乗せたエンジン付ボートと、「こんにちは」と叫ぶみやげ物売りの声にいらついた。ただ、日の出はすばらしくきれいで、インドの朝が、ここでも、始まっていく。川岸に火葬場があるわけだが、昔から木焼機が使われ、灰は自然と川に流されていくという。最近では、電気釜ができ、木葬よりも安いそうだが、多くはそれを嫌うという。木で焼き川に流す方がいいらしい。何となくわかるような気がした。ほんの数分の間にも、一体また一体。と布に包まれた遺体が川岸に運ばれてくる。死をまっとうできなかった者はすべて、焼かずに川に流す。今朝も、一体の赤ちゃんを抱え、川岸に来る者を見た。火葬場の横では、洗濯屋や沐浴者がいる。生と、死。

3人とも少し体調が悪かったので、一眠りした後、ベナレスの北、20Kmぐらいの所にある、サルナートという、仏陀が説法した聖地へ行った。公園の入り口にはいってすぐ、スワルナと言う20歳の少年に会った。スケベな少年で、小松のオペラグラスを借りるや、木陰にいるカップルを見ながらニヤニヤする。その公園では、2人の日本人青年にも会った。27歳の方は、仕事をやめ、インドへ2ヶ月の旅に来ているという。2月14日から旅を続けているらしいが、インドにあまりショックを受けない、という。おい、ぼくら、日々、ショックの連続です。この10日間で、多くの日本人に出会い、そして、話してきた。インドに来た理由は、さまざまあるわけで。



昨日逢った、物乞いの少女は、足にまとわりつく。牛は、道路を自由に歩き回り、サイドミラー無しの車は、牛が通り過ぎるのを気長に待つ。火葬場の隣では、布を石にたたきつけ、洗濯する者がおり、その横では、ガンガーの水で歯を磨くじいさんがいる。道路にテントを張って生活している人、道端で倒れて昼寝をしている人。そう。すべてが、THIS IS REAL(ゲンジツ).

[Now, we are staying "HOTEL INDIA" ]

<03/11(SAT)>

38度の熱で、体がだるい。明日から少々きつめの旅だっていうのに。小松、岡本を経て、とうとう俺にきた。





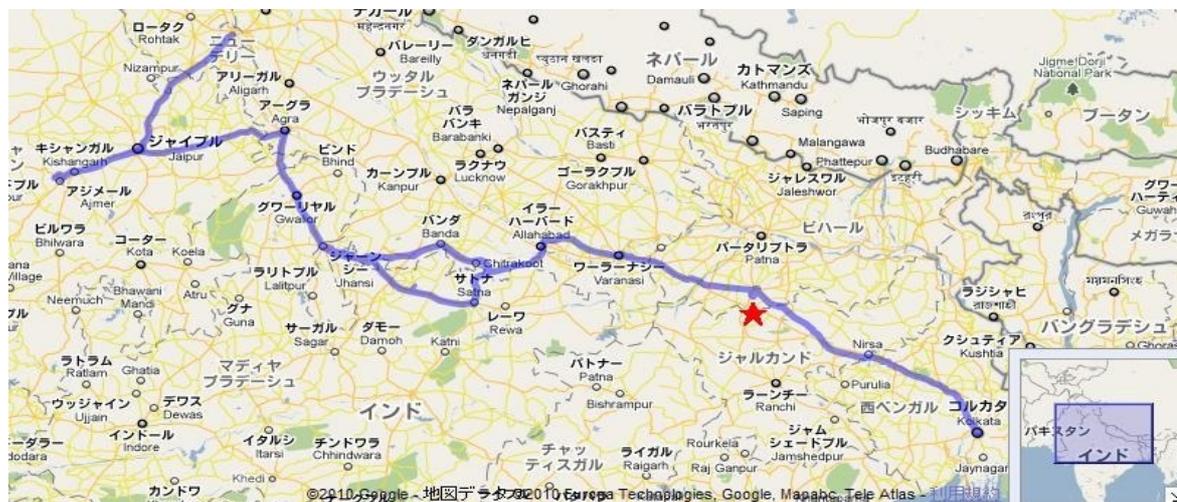




排気ガス、牛やヤギの匂い、死体の焼いた匂いが、さらに頭をくらくらさせる。それに、この強い日差し。

[Now, we are staying "HOTEL INDIA" ]

# 第7章 BUDDHA GAYA (ブッダガヤ)



## クマル族のくすり<パブロン

<03/12(SUN)>

朝7時。あまり気に入らなかった町ベナレスを発つ為、ムガルサライ駅へ向かう。朝から町は排ガスまみれ。おそらくCALCUTTA(カルカッタ)もこうだろうが、この町は、もううんざりだ。

列車に乗るのに苦戦した。乗るべき列車は2番線に来るはずだったが、既に1番線にいたらしい。さらには、どの車両だかわからない。が、インド人の親切に救われる。昨日ホテル近くのバーキングで会ったインド人に。ただ俺はまいていた、昨日の熱がまだ下がらない。

GAYA(ガヤ)の駅で、他の日本人のガイドをしていたインド人の車に、ただで乗せてもらい、次なる町、ブダガヤへ。もちろん、親切の裏には訳がある国なのだが、その話しがいつ出てくるかと、今ではワクワクするようになっていた。

俺は体調が悪かったので、小松と岡本に買出しを頼み、部屋で洗濯をした後、ベッドでうとうととしていた。そこへ、親切な日本人の小松さんと「お巡りさんの弟」と名乗る人物が、自称医者連れてやってきた。医者診断は、こうだ。おもむろに患者の問診が始まる。「熱は?」「ある。38度」「咳は?」「ない。」「脈を取らせて?」「...」。あきらかに早すぎる問診の結果は「かぜ」。

やはり、少し、熱があるようだ。



[Now, we are staying "LOAD BUTTA"]

<03/12(SUN)>

今日はゆっくりと観光することにした。昨日、飲んだパブロンのおかげで、熱は下がった。もっとも、小松が心配して連れてきてくれた自称医者に処方してもらった薬があったのだが、37.5度ぐらいの熱で、怪しい薬3粒は怖かった。すまんね、ありがとう、小松。





今日、夜9時34分GAYA発の列車まで、だいぶ時間がある。しかし、12時までにチェックアウトしなければならない為、午前中に少し寺院群をまわった後、もうGAYAへ出てしまおう、ということになった。GAYAから車に乗せてもらったり、ホテルを手配してもらったり、食事に誘ってくれたり、小松に薬をくれたり、ただ何だか、いやな匂いがしたクマル一族。ブッタガヤを牛耳っていた彼らの店には一度も顔を出さずに、ブッタガヤを後にしたことを覚えている。

夕食の駅前レストランのチキンカレーは辛すぎて食えず、さらにここに来て初めて列車の遅れを目の当たりにした。2時間半の遅れ。それに、停電。駅員は笑顔でこう説明してくれた。「This is indian system！」乗れたはいいが、2等寝台は、いごちが悪い、せまい、暑い。それに、蚊。そして再び、インドの朝は、夜明けとともに。

[Now, we are staying "DOON EXPRESS"]

# 第8章 LAST ONE CITY (カルカッタ)



オワリナキタビ。

---

<03/14(TUE)>

(日本で、今、何が起きているのか非常に気になる)

いつものように夜明けとともに動き出すインドに、目が覚めた。といっても、暑さと、列車内を動き回るトースト屋、菓子屋、それに、チャーイ。目覚ましは、その掛け声だ。「チャーイ！チャーイ！チャーイ！」

俺と岡本は2段目、小松は3段目に寝ており、下の乗客が俺が起きた時にはいなかったもので、ベッドを倒し、一番下の1段目を勝手に使うことにした。あまり、腹が減っていないし、朝は腹が弱い体質だったのだが、チャーイ屋の笑顔に少々魅かれ、チャーイ1杯とバタートーストに何か特製のスパイスをかけてくれた気前のいいトースト屋から朝食を買った。しめて、8Rs。地平線に広がる田園風景と所々の池の周りを囲む集落を見ながら、ほおぼる。俺が飯を食っている時に、岡本が起きてきたので、あまりうまいとは言い難いトーストバター+αをプレゼント。岡本も、インド式目覚ましにまいったようだ。そういえば、朝目覚めたとき、岡本のスニーカーが一足、その下の座席に無造作に置かれていたので、起きたので聞いてみると、岡本は苦笑いと共にこう言った。「盗難」怒りよりも、むしろ、謎。なぜ1足。インド初の盗難事件は、迷宮入り。犯人も動機も。

最後の都市CULCATTには、カルカッタ駅ではなく、ハウラーという駅に着く。外の景色は、今までとはまったく異なり、ヤシの木など、南国風で、列車内を通りすぎる風は、なま暖かかった。



カルカッタは、インドの、また違った顔を見せる。今までのおなじみのリクシャーは姿を消し、4輪のタクシーが、例の運転で、道路を駆け抜ける。DELHI以上の高層ビル群は、大都会のイメージだ。さらには、おそらく帰るだろう日本を思い起こさせる。

世界各国からインドへ来るバックパッカーと同じように、サダルストリートを目指した。安宿街ということで、きたないと思いきや、意外に道路や建物はきれいで驚いた。宿は何となく決めていたので、近くのレストランで小休止。その店の客にインド人はおらず、東洋人(日本、...?)、それに欧米人など。さながら外国人居住地。目的の宿はサイクルリクシャーやタクシーや人力車のおやじ曰く「gone(もう無いよ)」だから、「俺達のホテルへ来い」うそが始まったと思いきや、closeしたのは本当らしい。3tierの列車でとっても疲れていたの、少々奮発し、中上級ホテルへ。

今までのインドで、多くの牛を見たが、3人はとにかくビーフが食いたくて、Lytton Hotelという深夜特急で沢木耕太郎が泊まったホテルのレストランで、ハンバーグステーキを頼んだ。最初の一口は、たまらなかったが、今までの飯の量が少なめだったのか、胃が小さくなったのか、ほとんど残してしまった。けど、腹はいっぱいで。ん～、これ、ガストの目玉焼きハンバーグ。ホテルに帰り、熱いシャワーを浴び、寝る。

<03/15(WED)>

わりとゆったりと過ごした1日。8時に目が覚め、ルームサービスで軽い朝食をとった。souieba 昨夜、夢の中で誰かの手に胸を押さえつけられ、うなされたのを思い出した。



12時頃に、AC無しの安い部屋に換え、昼飯を求めに、中華料理屋を目指す。改めて、カルカッタの町は都会だと感じる。舗装された道路と歩道のガードレール。それに、そっけない人たち。客引きにはもううんざりだったのが、何かさびしい気分。中華料理屋は、インド飯に慣れきった俺達にとってうますぎた。味は、日本料理には負けるが、インディアンフードには圧勝だ。ワンタンスープと中華丼を頼んだ。うまいんだが、昨日同様残してしまった。



満腹の後、インド博物館を目指す。インドの町はどのアングルからも絵になる気がして、小松と岡本を撮る。博物館は、小松曰く「ゆっくり見ると2日かかる」予想通り、数階建てで、あやゆるものが展示してある。石、動物のはくせい、石造、絵画、楽器、武器、…。すべて見る体力が無かったので、はしょった。

ホテルに戻り、一休みした後、俺と小松は明日のお土産購入の値段と品定めに政府直営の店やら、マーケットやらをまわりまくった。だいたい値段を把握したので、ホテルに帰る途中、久しぶりに例の声、「HELLO!! Japani!! 千葉に兄貴の嫁がいて...、」うんざりというよりは、少し、いい気分。びみょうだね、この気持ち。



[Now, we are staying "Lindsay HOTEL"]

<03/16(THU)>

少し酔っている。

今日は、インド最後の夜。明日19時過ぎのエアインディアで日本へ。

カルカッタの高級レストランでインド最初の乾杯と同じメニュー。タンドリーチキンにナン、それから、ビール。「cherrs!!!」最高だ。しめて、500円(250Rs)。そういえばデザートも食った。トリプルサンデー。

インドに来てはじめて、日本人のアイデンティティーを思う。仲間意識、技術力、資金力。今、少し酔っている。

[Now, we are staying "Lindsay HOTEL"]

<03/17(FRI)>

朝、部屋を出る前に、小松が「帰りたくねえ」と叫んだのが、少しわかるような気がした。こんな国、もう二度と来たくないという気持ちとは裏腹に。

インド最後の観光は、イーデン庭園。深夜特急に、そして地球の歩き方に書いてあったその場所は、公園に大量のねずみが住んでいるという。ホテルからのタクシーは、なかなか料金交渉が折り合わず、どうにか30Rsで交渉をつけ、乗る。ところが、この運転手は、イーデン庭園を知らないらしく、よくわからない球場の前で降ろそうとする。近くの人に小松たちが尋ねると違う、という。10分後、俺らが、イーデン庭園なる文字を見つけ、引き返し、入り口の前へ。40Rsと言いやがったから、どなりつけてしまった。腹は痛いし、外は暑いし、おやじは道に迷うで。どなりつけてまで、到着した庭園には、ねずみガーデンは無く、北の端に、さっきの球場が。どなりつけたことに後悔して、最後の列車Subway。

地下鉄は、もちろん日陰だし風は涼しいし、悪くなかったのだが、インドの喧騒が消えたインドはさびしいものだった。地下鉄が終点のDumdum駅に着くとき、インドの町並みが顔を出した。その時、思わず、「Hello! INDIA!」と言ってしまったことを覚えている。そして、最後のタクシーの料金交渉は、いっぱつで決まったわけで。

さあ、さあ、さあ、空港のロビーは日本人だらけで。いざ、日本へ。

俺がインドから持ち帰ったもの。カーマストラ(インドの性教本)とサンダルウッドの数珠と。3つ目は言葉だ。

非暴力に訴えた偉大な人 ガンジー。彼は自分の足跡を後世に残した。彼ら(インド人老若男女)から、にじみ出ていたメッセージはこう、「日々、自分らしく!!!」

